

FOA-NEWS

通算第32号

2012/2/19

笹田さん、連盟から表彰される

関東審判部の笹田英次さんが、11月27日に横浜スタジアムで開催されたあずまボウルのハーフタイムに、アメリカンフットボールへの長年の功績により、関東学生アメリカンフットボール連盟表彰を受けました。

笹田さんの経歴

1934年生まれ

＜過去の主な役職＞

国際アメリカンフットボール連盟(IFAF)初代プレジデント

元日本アメリカンフットボール協会理事長

元日本フラグフットボール連盟理事長

＜略歴／推薦理由＞

東京都立西高校を経て、日本大学アメリカンフットボール部で活躍、1955年甲子園ボウル初優勝に貢献されました。

卒業後、関東地区で高校、大学の試合の審判員として活動を開始。

1960年からは関東審判部の運営に関わり、当時の安藤信和審判部長を支える若手審判員として幅広い運営活動をされました。その後も関東審判部副部長として日本の東西ルール解釈の統一化、NCAAからの最新メカニックの導入、そして関東審判部理事会の組成など、長年に渡って関東審判部の活動を推進し、関東地区のアメリカンフットボールの普及を支援されてきました。



また1964年の日本審判協会設立に関わり、1986年からは日本競技規則委員長に就任されました。

1997年には日本協会理事長に就任、米国を初めとして海外組織との積極的な交流を推進され、1999年IFAF設立と同時にIFAF初代プレジデントになられ、アメリカンフットボールの世界的な規模の普及活動に携わってられました。

審判員としては50年以上の経験を持っておられ、現在も関東審判部技術委員としてグラウンドでの審判員の評価を実施し、若手審判員の育成にご尽力いただいております。

あずまボウルのクルーとして

2011/11/27 @横浜スタジアム 野坂 賢臣 (SJ)

今回、あずまボウルのアサインのオファーを最初に受けたのは、10月のクリニックの時だったと思います。その時の率直な心境は、ワクワクする気持ちと、自分で大丈夫かなという不安感の半々でした。

その後トライアルのゲームを3試合こなしました(10月×1部1試合、11月×1部2試合)。幸い3試合とも私(SJ)と同じサイドの永井正二さん(HL)とゲームをこなすことができたのは、タイミングやクセ(!?)を知るうえで貴重な場でした。



また、トライアルでは理事やインストラクターの方にもゲームのチェックをいただきましたが、その中で特に協調されたのが「ボールデッド後の4秒間」を特に注意することでした。もちろん、サイドラインを割った後等の選手の動きを特に4秒間は注視することです。

当日、実際のゲームが始まると、最初のうちは若干フワフワした感じがありましたが、すぐに通常同様にゲームに入れたと思います。

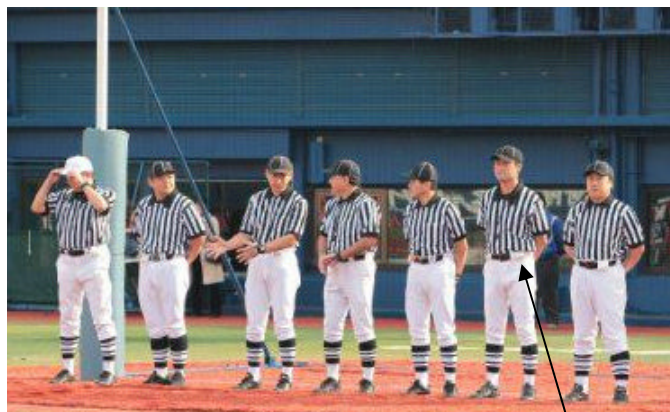
また、その「4秒間」と併せて特に気をつけたことは、ヘッドコーチ（HC）のタイムアウトについてです。大きい試合になると、通常のゲーム以上にHCはタイムアウトのタイミングに神経を尖らせがちです。ですので、2Q・4Qの終盤はゲーム展開を見つつ、監督の動きも普段以上に注視するようにしていました。

ゲーム自体は逆転もある引き締まった内容の好ゲームとなり、選手同様私も集中力を切らさず何とかやり切ることが出来ました。

最後になりましたが、このような大きなゲームに参

加させていただき、非常に大きな経験を積むことができたことに感謝いたします。また、理事、インストラクター、スタンバイ、サポートクルーを含めたクルーの方々の協力があってこそ無事にゲームが終われたと思います。

そして何よりもっと審判としての技量を向上させたいとより思うようになりました。今回は本当にありがとうございました。



野坂さん

Japan X Bowl のLJ を務めて

2011/12/19 @東京ドーム 遠藤 昌春 (LJ)

2011年12月19日 東京ドーム。エンドライン上にクルー7名で整列すると、『いよいよ!』という興奮と共に緊張感が急に増して来、そして君が代が流れると脚が震えだした。何とか震えを抑えようと掲揚されている日の丸を注視しているうちにスタンドとグラウンドがだんだん別の場所のように感じられてきた。私は、その距離感によって徐々に平静を取り戻し、君が代が終わる頃には脚の震えも収まって試合に臨む心構えが出来上がった気がした。

この試合で決めたテーマは、『プレーの始まりのタイミングでの集中力の発揮』。富士通はノーハドルオフェンスが基本であり、とにかくプレーの始まりのタイミングが大事だと考えていた。

テーマとする『集中力の発揮』はそれなりに出来たと感じているが、試合を振り返ってみると反省点がたくさんあり、まだまだ審判としての未熟さを痛感している。

一番の反省点は、1QのAチーム5ydsラインから3rdダウン8yds。ゴールラインを気にするあまり、ファースト・ダウンぎりぎりのショート・パスへの反応が遅れ、フォワード・プログレスの判定を数ヤード手前からせざるを得なかったこと。マニュアルを基本としつつも、複雑な状況では応用力を発揮できるようにならなければ、と痛感した。



遠藤さん

そんな未熟な私が何とか大過無くLJを務めることができたのは、JXBに向けたトレーニングでクルーの皆様とコミュニケーションを深め、信頼感と安心感を醸成できたからこそだと思う。クルーの皆様には、率直にダメな点の指導をしていただけた事に改めて感謝したい。

私は、高校の審判を20年近くやってきたが、クリスマスボウルの審判をきっかけにもっと大きな試合で笛を吹きたくなりFOAに参加し、今回念願のビッグゲームで笛を吹かせていただくことができた。そして、ますます審判をすることが好きになったように思う。



まだまだ審判としては未熟だが、引き続き技術と判断力に磨きをかけると共に、これからビッグゲームを担当される方の役に立つよう、私が教えていただいた様々なことを伝承するよう心掛けたいと思う。

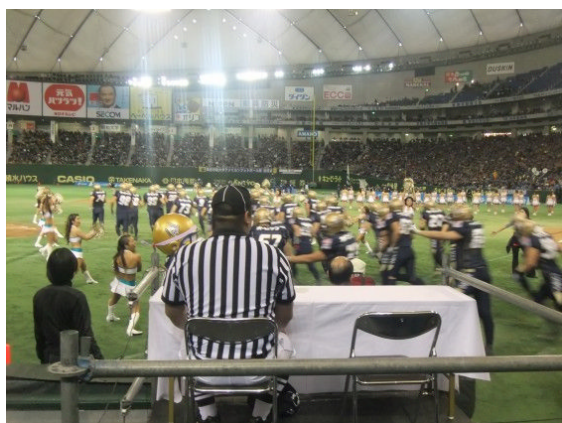
最後になりましたが、JXB に向けてお世話になりました大勢の皆様と、試合で常的確な対応をいただいたサポートクルーの皆様へ改めて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

ライスボウルを終えて

2012/1/3 @東京ドーム 傍嶋 隆史 (FJ)

ライスボウルを終え、振り返って考えてみると、大変だったとか、楽しかったというよりも、「あっ」という間に終わってしまったという感じです。その中で、印象に残っている事は、大ベテランの先輩方と数ヶ月間、固定クルーとして数試合及びミーティングを行った事です。

まだまだ半人前の私にとって、クルーの先輩方からは様々な事を学びました。特に「反則のイメージ共有」「審判（黒子）としての見せ方」について。反則の基準をできるだけ統一するという事で、いつの間にかクルーとして一つにまとまっていく雰囲気。プレーが見やすいポジショニング、見た事だけについて判定、シグナルや判定はあせらずゆっくり落ち着いて。当たり前の事かもしれませんが、それがなかなか難しい。しかし、それを自然にこなせれば「カッコイイ（出来る）黒子」に見えるという事。言葉足らずでなかなか上手く表現できませんが、細かい部分の基本的な事が重要だという事を改めて感じました。



（七回忌を終えた佐藤浩行さんのご令嬢といっしょに）
傍嶋さん

またそれ以外では、数試合における様々な面白エピソードが…。「R が遅刻しそうですが…誰か注意するべき…ですか?」「残り 10 秒…何故か 0 秒に見えて笛を吹いてしまうのですが…」「11 月中旬…大雨強風なのに…半袖…ですか?」「何故…サイドライン上を金ちゃん走り…走っているのですか?」等。ほんの一例ですが、お茶目な先輩方の姿がたくさん見れて、良い意味でライスボウルへの緊張感がほぐれました（笑）。

唯一ライスボウルでの心残りが 1 点、それはファウル・マーカーを投げたかったという事です。FJ 側では、特に際どいプレーが無かった（と思います?）為、投げる機会がありませんでしたが、あの東京ドームの大観衆の前で一度は投げてみたかった…。

最後に、ライスボウルという大舞台を経験するチャンスを与えて頂き、また、影で様々なサポートを下さった審判部の方々に感謝を込めて、私の感想を締めくくりたいと思います。

日本トップリーグ連携機構（JTL）審判研修会

2011/08/20-21 @味の素ナショナルトレーニングセンター

國崎 智明

日本トップリーグ連携機構（JTL：<http://www.japantopleague.jp>）の審判研修会に参加してきましたので内容等につきまして報告をいたします。日本トップリーグ連携機構とは、日本の団体球技各リーグが集い強化活動の充実及び運営の活性化を図る目的により2005年5月に結成された組織です（当時8競技9リーグ）。現在は10競技12リーグによる組織で、Xリーグは2010年12月に加盟しました。

本機構の審判研修会は、国際的な活躍を目指す審判が一堂に会し、その資質向上と各競技の枠を超えた審判の交流を図ることを目的として毎年開催しています。今回は5回目で、各リーグから40名参加しました。アメリカンフットボールは今回初参加で、元部久敬（西日本社会人）、田口眞行、中内克行、七久保裕哲、國崎智明の5名が参加しました。

<1日目>

同じ団体になるべく同じ班にはいらないように、7グループに分けて研修が行われました。

1. コミュニケーション実習 齋藤実講師(専修大学経営学部准教授)

より良いコミュニケーションをするために大切なことを学ぶという観点の研修でした。各班に、「ペーパータワー作成」という指示書が配布されました。指示書には、できるだけ高い自立型のタワーを完成させよという指示と、ルールが記されていました。また各班には、異なる道具が配布されました。参加者はルールを読み込み、その結果、他の班と互いの道具を交換しあてってすすめようという意見もありましたが、班対抗のコンペではない、という結論に達し、すべての班の全員で一致協力し、ひとつのタワーを完成させました。その成果物は、講師が想定していた以上のものが出来上がり、たいへん盛り上がりました。その後、レフリーにとって重要な資質について意見交換をし、各グループで1つずつ「審判とは～である、～べきである」といったフレーズを作成し発表しあいました。

この研修の講師のレクチャーの中で3・3・3の法則というのが印象に残ったので紹介します。

- ・「見た目の3秒」瞬間的な評価、判断がなされる。
- ・「挨拶の30秒」声のトーンやスピード、抑揚から「人柄」を見られる。
- ・「会話の3分」態度や会話の内容から、ビジネス能力などの判断がなされる。

試合前のコーチとの挨拶のなかでいつもコーチからこのような評価を知らず知らずのうちにうけているのだな、（もうここからゲーム・コントロールは始まっている）と感じました。



（全員の力で作成した紙のタワー）

2. メディアトレーニング 近藤洋子講師ら2名（フォーシーズンインターナショナル）

メディア対応についてレクチャーがあり、マスコミの影響、メディアを通じて視聴者にメッセージを送ることができるので、それをうまく利用するようにしよう、ということを知りました。質問に対する回答は、「結論を先に」が重要で、主張したいポイントを先に述べ、それに理由やストーリーを付加して話すことによって、説得力が増し、記憶にも残るメッセージを残すことができる、と教わりました。また、簡潔、明瞭、具体的であること、さらに、決して他人の批判はしないことも重要なポイントであると教えられました。

その後、回答しづらい質問に対する対応（例：「試合中、判定についてブーイングがおこったがそれについてどうか？」等）について考え、班内で互いにロールプレイングを行い、その答え方、内容について議論、指摘しあい、実際にビデオカメラを用いた囲み取材を想定した状況設定のもと実習を行ないました。

現状ではアメリカンフットボールの審判員がマスコミからインタビューをうける機会はない（2009JWCの時のSky-Aでインタビューされた東さんや2011SWCの時の神奈川新聞の取材を受けられた田口さんのような例はありますか）とは思いますが、雑談レベルで専門誌の方と話す機会はあるかと思うので、油断しない（しゃべりすぎない）、という意味では知識を吸収できました。

1日目の夜は全員集合での懇親会で親睦をはかりました。各自自己紹介等もあり、大変盛り上がりました。

<2日目>

3. 正しい歩き方・走り方 齊藤太郎講師ら4名 (NPO 法人ニッポンランナーズ)

体育館を使って“正しい歩き方・走り方”の実技研修が行なわれました。体幹を使って歩く、走るがもっとも効率的（バテを防げる）、と説明がありました。腕振りは肩甲骨を使って行う、また骨盤を前傾させることを意識して行うようにと指導がありました。

講師陣が見本を見せたり、各審判の走りをビデオカメラで撮影した動作を見せたりしながら、理論と実践を学びました。実際、サッカーのトップレフリー（次項の深野氏）の中にもニッポンランナーズの指導を受けている方々がいらっしゃるそうです。

4. 基調講演 深野悦子氏（日本サッカー協会 女子1級審判員 / 国際審判員）

2011 FIFA 女子ワールドカップにレフリーとして参加された深野氏の講演を聴きました。

日本サッカー協会傘下の審判組織の説明に始まり、2011 FIFA WC の話と盛りだくさんでした。印象に残ったのは、とにかくサッカーのレフリーの準備というのはルールブックを読むというのが基本だということ、フィジカルトレーニングを重要視されている、ということでした。トレーニングに関しては、国際大会では現地着の翌日にすぐ体力テストという場合もあり、そこで一定基準を満たす値をださないと強制送還になることもあるそうで、また、その大会を通じてエクササイズが毎日のレフリーのスケジュールの中に組み込まれているそうです。深野氏の勤務先はJリーグですが昼間は仕事があるので平日は夜しかトレーニングできず、夜走っていて（坂道ダッシュとかして）職質を受けたこともあるそうです。サッカーの体力テストの基本は以前は12分走だったそうですが、試合中の心拍数などのデータを参照した結果、現在では40M×6本（1分30秒休み）、インターバル走（（150M走+50M歩）×20本）がメインになっているとのことでした。

この講演内のやり取りのなかで他の競技はシャトルランをメインにしているのが多いことがわかったのと、体力テストを導入していないのはバレーボールとアメリカンフットボールだとわかりました。また他の競技は資格と連動して吹ける試合が決まってくるのに対して、アメリカンフットボールはそうでもないのに、なんとかそういう資格制度が、しかも全国统一基準のものが導入できないか、とも考えさせられてしまいました。深野氏がおっしゃっていたことの中で印象に残ったことを記しておきます。

- ・ 準備がすべて
- ・ ウィークポイントをつぶす
- ・ ルールブックが基本
- ・ 心を込める、いつでも本気
- ・ 苦しいことは楽しい
- ・ すべてを楽しむ

後日談ですが、セ久保さんのご招待で深野氏はなでしこリーグ・レフリーの千葉氏とともに2011 Japan X Bowl を観戦にこられ、深野氏は試合後の反省会にも参加いただき、そこでも興味深い話を伺うことができました。また、深野氏は元旦の女子サッカー日本選手権のレフリーも担当されました（千葉氏がアシスタント・レフリー）。

5. 全体の感想

他の競技の審判の意識や国際審判の活動を知ることができました。また審判員としての心がけの大事さを別の角度から学ぶこともできたと考えます。審判員各々が自分の愛するスポーツの審判に真摯に取り組んでいる姿を目の当たりにしてとにかく刺激になりました。今後、ますます他の競技の審判とも交流を深め、アメリカンフットボールの普及・発展につながるようなヒントをいただく機会にできればいいな、と考えます。

研修会当日はレフリー・クリニックを欠席することになってしまったのが心苦しいのですが、このような貴重な機会を与えていただきありがとうございました。



深野さん





U19 インターナショナルボウル開催される

2月1日、アメリカのテキサス州オースティン市において、19歳以下の選手による世界選抜チームとアメリカの高校生の選抜チームの試合が開催されました。日本からはスペシャルチームコーディネーターとして山田晋三氏（IBM）、クォーターバックコーチとして板井征人氏（関西大学）の両名が、また選手としてはRB 前田真郷（関西大学）が選出されました。この大会では試合の登録選手外の育成チームも編成され、コーチとして宇野裕樹氏（立教大）、選手として小林貴（法政大）、赤津裕之（明治大）、佐嶋優輔（関大一高）、笠井英治（正則高）の4選手も練習に参加しました。



試合の結果は世界選抜チームが35対29でアメリカ選抜に勝ちました。米国代表が国際試合で敗戦を喫するのは、2007年、2011年の世界選手権、2009年のU-19 IFAF ジュニアワールドチャンピオンシップ、そして過去2年間のインターナショナルボウルも含めて、ジュニア・シニア世代では初めてのことで、歴史的な勝利になります。日本から唯一出場したRB 前田真郷選手は、RBとして5回18ヤード、パントリターナーとして1回27ヤードの活躍を見せてくれました。



第2回ジュニア世界選手権6月に開催

6月28日～7月7日、アメリカテキサス州オースティン市にて（JWC2012：Junior World Championship 2012）」が開催されます。日本協会も、ジュニア日本代表チーム（U19）候補

選手の選考を3月から始める予定です。

昨年はSWC2011:Senior World Championshipで日本代表は第3位となりましたが、ジュニア代表チームの大会での活躍が期待されます。



ロジャーズ レディング氏クリニック開催

CFO (College Football Officiating) のナショナルコーディネーター兼競技規則委員長を務めるレディング氏が来日し、関東で初めてのクリニックを開催予定です。日時は5月5日（土）・6日（日）を予定しています、詳細については後日お知らせい

たします。なお昨年に続きレモニア氏のクリニックも4月14日（土）、15日（日）の予定です。今から日程の調整をしていただき、是非出席をしていただきたいと思います。